

## 日本活断層学会 2015 年度秋季学術大会 大会報告

2015 年 11 月 27 (金) ~29 日 (日) に岡山大学創立 50 周年記念館・金光ホールで日本活断層学会 2015 年度秋季学術大会を開催した。参加者は 110 名、うち 3 名は学生会員、29 名は非会員であった。27 日午後に口頭の一般研究発表およびポスターセッションのコアタイムを設け、夕方 17 時 15 分より懇親会を岡山大学生協ピーチユニオンにて開催した。28 日は引き続き一般研究発表に続き、各賞受賞表彰式・学会賞受賞記念講演を行い、午後より「長大活断層の強震動評価の高度化に向けて」と題したシンポジウムを開催した。最終日の 29 日は、「四国中部の中央構造線」をテーマとした巡検を実施した。

### 1. 一般研究発表 (27 日午後・28 日午前)

口頭発表は 11 月 27 日 13 時~15 時 50 分までと翌 28 日 9 時~10 時 40 分までで計 13 発表、ポスター発表は 27 日 15 時 50 分~16 時 45 分までをコアタイムとし計 13 発表が行われ、口頭発表・ポスター発表ともに活発な議論が交わされていた。発表内容は昨年発生した神城断層地震 (2014 年長野県北部の地震) に関するものが、口頭発表で 4 件、ポスター発表で 2 件と多かったものの、中国・四国地方と関係の深い発表も多く、岡山での開催の地域色が見受けられた。ポスター発表の会場は創立 50 周年記念館 1 階の交流サロンが使われ、やや狭かったことで発表パネルが近接していたため、混雑した状況も発生した。最近は珍しくなくなったアナグリフを用いた発表も多く、ポスター発表ならではの工夫も随所に見られた。また、同スペースにおいてフォトコンテストの入賞作品・応募作品が展示され、大会期間内に決定する特別賞の投票も行われた。フォトコンテストの応募作品は例年に比べて少なかったが、写真には興味深いものが多く、立ち止まって眺める光景を多く目にした。



## 2. シンポジウム

大会 2 日目の 11 月 28 日 13 時から「長大活断層の強震動評価の高度化に向けて」と題したシンポジウムが開催された。このシンポジウムは、活断層の研究者と強震動の研究者の間で地震動の予測の高度化のために、今後より一層の協力体制の構築を期待して、次のような趣旨のもと企画された。

「地震調査研究推進本部による地震動予測地図の作成や、原子力規制庁での耐震安全性評価では、中央構造線活断層帯に代表される長大活断層帯の地震の規模や地震動の予測手法のさらなる高度化が望まれている。そのためには、活断層と強震動あるいは理学と工学といった異分野間での相互理解と研究協力が不可欠である。そこで、本シンポジウムでは、長大活断層帯の強震動の評価事例に加えて、強震動の計算を例示することで、長大活断層帯の地震動評価について今後目指すべきテーマを議論する。」

講演は順に、「関東地域の活断層の長期評価の概要と課題（山際敦史，文部科学省 研究開発局 地震・防災研究課）」、「活断層データから特性化震源モデル・強震動予測へ-その課題と期待（釜江克宏，京都大学・原子炉実験所）」、「伊方（原子力）発電所における中央構造線の強震動評価（松崎伸一，四国電力・土木建築部地盤耐震グループ）」、「断層破壊パラメータの設定法とそのばらつきが強震動予測に及ぼす影響（香川敬生，鳥取大学・工学研究科 社会基盤工学専攻）」、「震度分布情報を用いた濃尾地震の断層パラメータの評価（栗山雅之，電力中央研究所・地球工学研究所地震工学領域）」、「米国 SSHAC 基づく確率論的な地震動評価法の日本への適用（酒井俊朗，電力中央研究所・原子力リスク研究センター）」で、その後、司会の吉岡敏和・学会行事委員長の進行により、講演者間および講演者と会場の間で質疑が行われた。

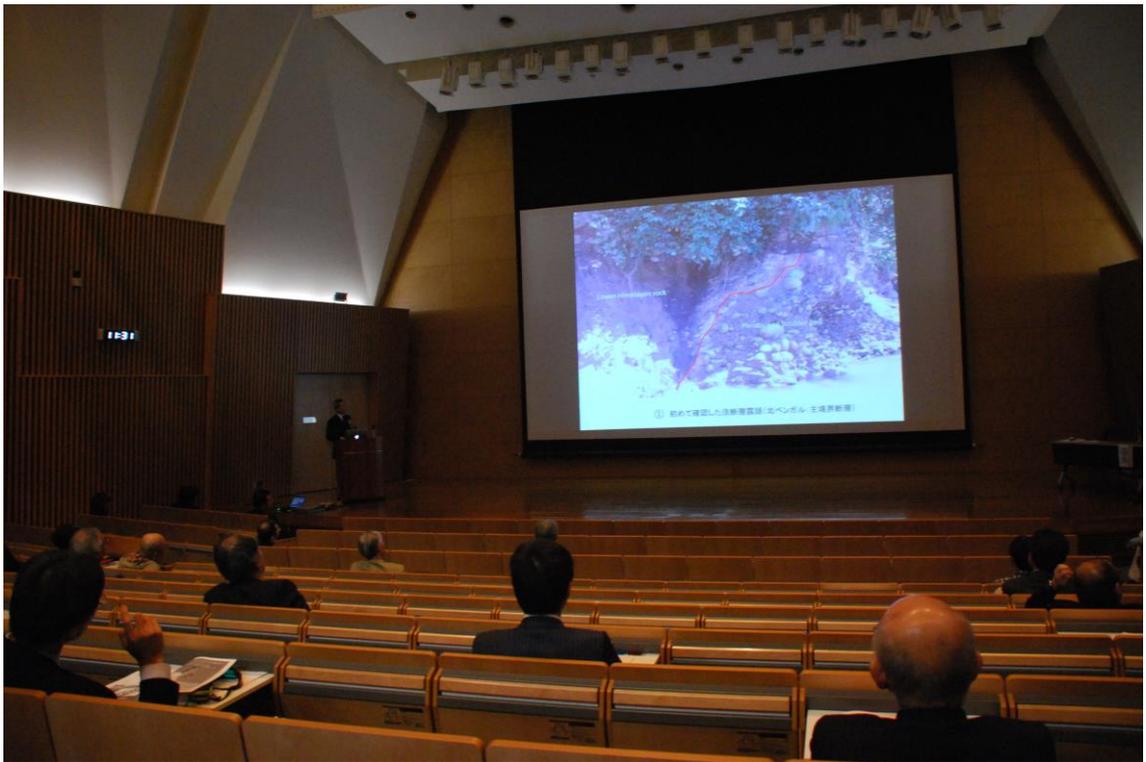
この質疑の中で、シナリオを変えた時の複数の地震動シミュレーションの結果のばらつきの考え方やロジックツリーを用いた評価の重要性が示された。また、長大活断層のスケーリング則の課題と、実務の面での取り扱いなども分かりやすく紹介された。最後に、吉岡行事委員長による、「長大断層帯の連動性については、活断層研究の専門家であっても評価は難しく、意見も分かれるところであるが、今回のシンポジウムで強震動評価に重要な事項であることが、具体的な評価結果などをもとにより一層明確となった。今後、活断層の研究分野も努力を継続して、強震動の研究分野と共に地震の危険度評価へ貢献していくべきである。」とのまとめをもって閉会した。



### 3. 各賞授賞式

大会 2 日目 11 月 28 日午前の口頭発表の終了後、学会賞・若手優秀講演賞・フォトコンテスト優秀賞、入賞作品の表彰式が行われ、岡田篤正会長から表彰状と副賞が授与された。今回は論文賞の該当者はなかった。学会賞には、「長きにわたり豊かな発想で世界の活断層研究を牽引しただけでなく、地震防災などの様々な社会的課題に関して提言を行ってこられた」との理由から中田高会員に贈られた。若手優秀講演賞には石村大輔・遠田晋次・向山 栄・本間信一の 4 氏による「2014 年 11 月 22 日長野県北部の地震の地表地震断層と地震前後の LiDAR データに基づく地震時変位量」を口頭発表した石村大輔会員と中埜貴元・宇根 寛の両氏による「2014 年長野県北部の地震に伴う地表地震断層周辺の浅部地下構造と地殻変動」をポスター発表した中埜貴元会員の 2 名が受賞した。石村会員は昨年が続いての受賞となった。「日本の活断層・フォトコンテスト」の審査の結果（優秀賞 2 点，入賞 4 点，特別賞 1 点）に対して表彰が行われ、渡辺満久会員，石村大輔会員，吉岡由布子さんが表彰された。

授賞式に引き続き、学会賞を受賞した中田高会員により「収束型プレート境界の活断層—ヒマラヤと日本列島周辺—」と題する受賞記念講演が行われた。



#### 4. 懇親会

27日17時15分から、会場と道を挟んだ向かい側にある岡山大学生協ピーチユニオン4階で懇親会が開催された。懇親会には約50名の参加があった。岡山県出身の岡田篤正会長からの開会の挨拶のあと、宇根寛副会長による乾杯で宴が始められた。途中豊蔵勇会員から2016年学会カレンダーの紹介と、飛び込み企画で活断層学会への一言として、小俣雅志会員、木戸崇之会員、室井翔太会員、熊原康博会員が壇上で学会に対する提言などを行った。最後には2016年度の開催地に内定している法政大学の杉戸信彦会員から日程や会場についての紹介があった。行事委員長の吉岡委員に終了の挨拶をしてもらい懇親会は19時15分に終了した。料理は岡山の特産品である祭り寿司やホルモンうどんなどや地酒・地ワインなどが好評だった。



#### 5. 巡検（29日）

最終日の11月29日には広島大学の後藤秀昭会員の案内で「四国中部の中央構造線」と題して巡検をおこなった。シンポジウムとのつながりも意識して、長大な活断層である中央構造線を対象とした巡検が企画された。観察場所が四国で、岡山市から遠いため、早朝の6時30分というまだ暗い時刻の出発となった。日の出直後に瀬戸大橋をわたり、午前中は愛媛県新

居浜市萩生の中萩断層崖の変動地形の観察を行った。最初に中萩低断層崖と石鎚断層を遠望できる場所から概要の説明を受け、各所での地形を歩いて観察した。観察後、松山および徳島自動車道で三好市池田町に移動して、市街地の東の丘の上にある丸山公園から池田町の段丘と変位地形を俯瞰した。その後、州津坂口の工事現場で保存されている断層露頭に向かったがあいにく休日には鍵がかかっており、断層露頭を崖上から観察するにとどまった。東みよし町総合公園ではすでに草に覆われていたが、横ずれ変位速度計測にとって重要な Aso-4 が算出した地点を観察し、その算出方法などの説明を受けた。その後、三波川変成岩が露出する吉野川ハイウェイオアシスで昼食をとった。四国の特産品などお土産などをかう参加者も多く見られた。昼食後、東みよし町昼間付近において最新の活動に伴う 7m の横ずれ地形と累積変位と思われる 21m の段丘崖を観察した。また、芝生の衝上断層を車窓から観察し、三好市三野町上野のトレンチ調査地点周辺の変動地形を観察した。その後、阿讃山地を超えて琴平駅で一部の参加者が下車して、やや予定時間より早く 17 時過ぎに岡山駅に到着した。

会員・非会員 19 名と案内者 1 名が 21 名乗りの小型バスに乗車し、緊急用の別途 1 台の車が伴走して実施された。早朝からの巡検となったが、天候に恵まれ、中央構造線の典型的な変動地形をじっくり観察でき、充実した時間を過ごすことができた。変動地形の認識、読解法とともに、その情報の限界について、参加者の認識を深める貴重な機会になったものと思われる。



今回の大会は、少人数の地方大学で始めて実施された学会となり、参加人数に対する不安や、スムーズな運営に関する不安があったが、結果的にはそんな色ない参加者に参加していただけた。また、一般向けのシンポジウムではなかったが、強震動関係者などの参加もみられ、活断層研究分野の幅広い交流の一助になったのではと考えている。

最後に、本大会の設営・運営にご尽力いただいた学会事務局・アルバイト諸氏をはじめ、関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

2015年12月5日 実行委員会一同